



「花器」陶芸
平井 常子さん(備中町平川)



「普賢菩薩と文殊菩薩」貼り絵
有漢荘入所者の皆さん(有漢町有漢)



「七夕様」切り絵
藤井 恭子さん(高倉町田井)



「カラー」切り絵
光畑 嘉子さん(高倉町田井)

ミニ★トピックス



弥高山公園のアジサイ

(川上町高山) 撮影日: 7月8日

園内の小道やロッジの周囲に咲くセイヨウアジサイやニホンアジサイなど約3000株が6月下旬から花が開き始め、7月中旬に満開を迎えました。今年は春先に寒い時期が多かったため、例年より2週間遅れ。ブルーやピンク、紫の花が、訪れた人たちの目を楽しませていました。



「盆」木工細工
黒川 藤一さん(成羽町下日名)

作品の募集について

- 【文芸】短歌、俳句、川柳など
 - 【作品】絵画、工芸品、町の風景写真など
 - 自作の未発表作品で、一人一作品とします。
 - ギャラリーの作品については、その写真をお送りください。
(撮影が困難な場合は、ご連絡ください)
 - 住所・氏名・電話番号・作品の場合はタイトルを明記のうえ、お送りください。
- ※締め切り 掲載号の前月の末日(必着)

- 問い合わせ・送り先
〒716-8501 (住所不要)
高梁市役所企画課公聴広報係 ☎0210
Eメール: kikaku@city.takahashi.okayama.jp
- ※応募多数の場合は、紙面に掲載できない場合もありますので、あらかじめご了承ください。
※提供いただいた写真等は返却できません。

市民へ

文芸たかはし

(敬称略)

短歌

子つばめ口を揃えてデイ／＼順にえさやる親つばめ

赤木 文子 (備中町西山)

嵐吹く間に漂う舟のごと喘ぐ懊惱人の世の常

梅野 八郎 (松山)

久々の梅雨の晴れ間の空の色命を洗ふごとき清しき

小野はる恵 (原田南町)

夫婦して奉任作業に参加する八十路の夏は風もさわやか

亀石恵美子 (川上町仁賀)

たらちねの母なる胸のぬくもりを今だ忘れじ喜寿になりても

芝吹美代子 (落合町阿部)

足運ぶ成羽美術館筆の流れ友の作品眼を見張るかな

下向 近雄 (備中町平川)

ホトトギステッペンカケタカ昼夜啼き冥土との世往復の鳥

原田 由き (高倉町飯部)

よどみなく城の栄枯を老ガイド峡の驚涼しげに啼く

平 初音 (高倉町田井)

見渡せば山脈遠く重なりて成羽ダム湖に鶯の声

榊上 秀雄 (備中町西山)

今日もまたいのしし垣の杭の上子蛙並び霧雨を喰う

宮本 宮吉 (川上町七地)

山野草今年も咲いて木のかげにふたすじの糸二人しずかよ

森崎 道子 (宇治町宇治)

俳句

雨上がり春蟬鳴き出す木立中 平松 幾代 (長寿園内)

ゆすら梅又来て居るは小鳥かな 結城 成子 (宇治町宇治)

川柳

来る日々を一途に尽くしひとりばち 梶谷 文江 (石火矢町)

母の日を二番煎じた父の日よ 妹尾 昌美 (東町)

年がよりしかられ上手よいえがを 吉岡 麻江 (鶴寿荘内)

地名とよるし

二十一 吹屋



成羽町「吹屋」は海抜約五〇〇前後の古備高原上の小起伏の地形をした場所にあります。「吹屋」の中心は鉦山町で周辺には、水田や畑が点在し、西側には成羽川の支流坂本川が流れ、吹屋の町から下った成羽町坂本付近は新見市哲多町との境(峠)で分水界となつています。南北に走る坂本川沿いの谷底は、地質時代のうち新世代新第三紀中新世の海成層が分布していて坂本断層線谷となつています。また東側は高梁市宇治町で白石、大深、下谷などの集落を通つて宇治へと県道でつながつていて近世の成羽村から吹屋村を通り、新見村へ至る吹屋往來の道でした。

「吹屋」は元禄時代(一六八八〜一七〇四)から明治にかけて西国一の名銅山・吉岡鉦山を中心とした鉦山町として、また近世中期から明治にかけての弁柄の生産と販売で栄えた町でした。現在に残る町並みは、江戸時代から明治初期の建物が多く、赤茶色の石州瓦の家並み、明治期から入母屋型妻入と、江戸期の切妻型妻入とが混在し、塗込入り弁柄格子の堂々たる町家が立ち並び、重要伝統的建造物群保存地区に指定されています。

近世は川上郡「吹屋村」、幕府領として「石高九石余」(但し是は八新田村)「正保郷帳」一六四五〜四六頃」と初めて村名が出ています。畑作中心地域で耕地の生産力も貧弱だったようで、後の寛政六年(一七九四)の書上(大塚文書)に「吉岡銅山吹屋村之儀御高七拾石余之村方二而、百姓電百軒余二及び男女多勢住居仕御田畑者銅焼候而悪所多ク、中々農業斗二而渡世難相成、何れも銅山稼方相兼……」と書かれていて、「鉦山の村」として銅山稼ぎと農業の兼業の「村方百姓」として暮らして立っていたのです。

吹屋の銅山の始まりは一説には大同二年(八〇七)説があります。銅山稼ぎをしていた大塚理右衛門が寛政三年(一七九一)久世の代官の尋ねに対して答えた文書に「備中国川上郡吉岡銅山之義者、大同二年之発山二而……」(岡山県古文書集)「大塚家文書」と報告しています。もう一つの説は応永年間(一三九四〜一四二七)という説で、「前掲書」に「発山之砌者銀山二而……黄山之後大深谷に當時迄も相殘罷有候銅山二相成四百年余二罷成候……文化元年十一月」とあって、銅山になったのは四〇〇年以前だから一四〇〇年頃が正しいのでは……という説です。小堀氏が備中を支配していた頃に徳川氏の「御手山」だった銅山を吹屋村に払い下げ、大塚伊兵衛に頭取を命じて「村稼ぎ」のやり方に変えています。この頃までは「関東銅山」「石塔銅山」から変化しました。と呼んでいた(成羽町史)といわれています。「吉岡銅山」の名は近世になって佐渡金山の吉岡山の名をとって改めたといわれています。

天和三年(一六八三)頃から幕府は大坂の豪商和泉屋吉左衛門(後の住友)に請負わせ、経営方法を改めさせ、以後西国一の銅山となつたのです。それから後は、早川代官の指導で再び大塚氏を中心とした地元銅山師が稼業し、後の明治六年(一八七三)には三菱が近代化した経営で再興し、明治から大正にかけて最盛期を迎え、日本三大銅山のひとつとなりました。当時銅山の従業員は一三〇〇人だったといわれています。

一方、宝永四年(一七〇七)に発見された弁柄(赤色顔料の一種)の生産も発展し「弁柄屋」も江戸末期には五・六軒と工場が一〇軒があつて、西江・広兼・片山家などが株仲間を結成して量産・生産された弁柄は牛馬に積まれ吹屋往來を通り、成羽河岸の間屋まで運び出され、そこから高瀬舟で玉島港へと運ばれ、「吹屋弁柄」として有名だったので、今に残る吹屋の町並みは、弁柄によって栄えた町といつて良いのです。「吹屋」の「吹」という字には、ふく、ふき、かけるという意味があります。鉄や銅など金属を精錬し造り出すことを「鉦を吹く」といい「鑪」のことを「ふき」といいます。このことから精錬、鑄造に従事する鍛冶屋などの職人、施設のことを「吹屋」といいました。銅を精錬することを「銅吹屋」というたことに由来する地名なのです。

(文・松前俊洋さん)



吹屋の町並み